

# KDDI Foundation

財団法人KDDI財団 機関誌

vol.2  
APRIL 2011



# 2011年へ向けて



理事長

伊藤 泰彦

(KDDI 株式会社 顧問)

KDDI 財団が発足して早くも1年半が過ぎようとしています。その間、財団の方向性を決める出来事がいくつかありました。その一つが、2008年12月に全面施行された新しい公益法人制度です。当財団もこれに従い5年以内に新制度に移行することとなります。具体的対応につきましては順調に作業が進められておりますが、事業の大きな柱として「社会貢献」を前面に出し、長期的な視点に立った国内・国際貢献を目指すという基本においては全くブレておりません。さらに、今期からの新しい試みとして、これまでの海外から日本への留学生支援に加え、日本から海外、特にアジアへの留学生への支援を実施することとなりました。これも長期的な観点での日本の国際化への一助となることを願ってやみません。

## KDDI 財団の考える支援のあり方

当財団は、国際貢献活動、特に、開発途上にある国々への支援は、留学生への接し方も含めて、「やさしさ」を基本として相互理解することであると考えております。これに関して、私がよく引き合いに出す話があります。それは、米国のコリン・パウエル元国務長官が、退任1年後にテキサスで行ったスピーチで話された逸話です。スピーチは、退任直後の長官の環境変化から始まり、「開かれた国」の話に入って行きました。



パウエル長官が在職中、南米を歴訪し、ある大学で学生たちを相手に講演を行った時の話題です。

世界情勢、米国の中南米政策に関する講演後の意見交換で、出席した学生がアメリカに対する憧れと同時に批判を次々に述べた。学生は、必ずしも親米派が多いわけではなく、相次ぐ厳しい発言に会場がざわつき始めた。その時、一人の学生が手を挙げ、彼らの米国旅行の話をした。

『私たちは去年、英語学習のためにアメリカの大学に夏季留学を行った。場所はシカゴで、1ヵ月間の研修だった。研修は楽しくもあったが、学内での経験、街に出ての市民との触れ合いは必ずしも気分の好いものではなかった。人々が南米人に対して嫌悪感を持っていることは、こちらにも容易に感じ取られた。期待のはずれた我々も結果として米国に嫌悪感を持つこととなり、留学生同士が集まるようになった。そうした雰囲気の中、研修も終わりに近づき、折角の出会いを記念して仲間内でお別れ会を開くこととなった。』

『送別会の場所は、シカゴ市内のレストラン。我々は大いに盛り上がり、深夜近くにやっとお開きになった。しかし、ここで、困ったことに気がついた。全員の所持金をすべて集めても、レストランの支払いに数十ドル足りないのだ。そこで、ウェイターを呼んで、事情を話し、何とか後払いに出来ないかを相談した。びっくりしたウェイターは、店長に相談すると言って奥に消えた。』

『暫く待ってもウェイターは帰ってこない。我々は、無銭飲食を警察に通報されたのかと疑心暗鬼になった。。。。。そこに、やっとなのウェイターが現れた。“All set! You are completely covered!” 彼は笑顔で言った。驚く我々にこう付け加えた。“これは、あなた達へのアメリカ国民からプレゼントです。”』結局、彼が残りを立替えてくれたのだ。

「アメリカにはまだ、こんな市民がいるのだ。すべてを受け入れるオープン政策こそがアメリカの規範であり、私はその正しさを信じている。」自らがジャマイカ移民の子供だった長官は、こう結んだ。

出来すぎた話で、真偽のほどは分かりません。しかし、このウェイターのように自分たちをひけらかすことなく優しい気持ちで相手に接することが出来れば、素晴らしいことではないでしょうか。KDDI 財団もこんな支援を目指したいのです。

## 日本からもアジア留学を

今年から、KDDI財団では、日本から海外、特にアジア各地への留学生に奨学金を提供します。これは、国際貢献は援助という相手方への一方的な貢献と同時に、日本側が相手の国情を知る人達を育成すると言う相互行為も大変重要であると認識しているからです。最近の新聞情報でも日本人の留学生総数が激減していることを心配する声が聞かれます。例えば、米国への留学生は1990年代に比して50%以上の激減との報告もあります。一方、日本人の海外居住者数が約100万人に対して米国人は約600万人と、彼我の人口差をも遙かにしのぐ数値を見れば日本人の内向き志向は明白です。

30年後の国際社会の中で十分に生きられる人材を育てることも、我々の大きな使命であるとKDDI財団は考えております。今回の奨学金制度の追加措置により、たとえわずかでも、志のある若者を援助し、彼らが国を担う20年、30年後にはそれらの国々との間に太い道が通じていることを願ってやみません。皆様のご支援とご理解、よろしくお願い申し上げます。



KDDI株式会社  
代表取締役社長

田中孝司

昨年策定した「KDDIグループ2020年ビジョン」の中で、「世界中の人々に笑顔をお届けます。」とのビジョンメッセージを掲げました。

KDDI財団は、様々な社会貢献活動を通じてまさに国内外の多くの人々に笑顔をお届ける仕事をされており、KDDIグループとして引続き積極的に支援していきたいと思っております。

## CONTENTS

巻頭エッセイ

### 2011年へ向けて

伊藤 泰彦 理事長 (KDDI株式会社 顧問)

### 02 2010年度 KDDI財団優秀研究賞

#### オーバーレイネットワークにおける 自律分散型トラフィック制御機構の研究

笠原 正治

京都大学 大学院情報学研究所システム科学専攻 准教授

#### 電波防護ガイドラインの工学的根拠に関する研究

平田 晃正 名古屋工業大学大学院工学研究科 准教授

助成・援助対象者からの報告

◎ 社会的・文化的諸活動助成

### 04 つながるきもち ～ボクとキミとの架け橋に～

川村 卓也 CSN浜松 代表

### 06 アジアの人形芝居の伝統と現代、そして未来へ ～カンボジアの影絵芝居日本公演とその後～

塚田 千恵美 財団法人現代人形劇センター 理事

◎ 外国人留学生助成

### 08 On the Importance of Access to Good Education

Luis Ricardo Sapaico Valera 東京工業大学 情報理工学研究所

### 10 Bonds between Egypt and Japan

Eid, Mohamad Samir Abdelrahman 東京大学 工学系研究科

### 12 A journey from a rural village of Sri Lanka to Japan

Amaratunga, Tharanga Sandaruwan 長岡技術科学大学 工学研究科

財団の活動から

### 13 たのしいサイエンス・サマースクール

澤谷 邦男 東北大学大学院工学研究科 教授

### 14 プノンペンとカンダール州

大沢 潤一 財団法人KDDI財団 国際協力部 専任課長

その他の活動実績

### 15 2010年度 助成・援助対象者

優秀研究賞 / 調査研究助成 / 社会的・文化的諸活動助成 / 外国人留学生助成 / 国際会議開催助成 / 著書出版助成 / 海外学会参加助成

### 18 2010年度 研究奨励金対象者

### 19 2011年度 公募のお知らせ

### 20 雑感

#### インド回想

杉村和彦

KDDI株式会社 ソリューション推進本部

グローバルソリューション部2グループ 課長補佐

(前KDDIインドムンバイ支店)

本賞は、当財団の助成を受けて調査研究を実施された方の中から、優秀な成果を発表された方を表彰するものです。2010年度の受賞者は、審査委員会の審議を経て、2011年3月8日の理事会において、次の方々に決定しました。受賞された両氏に研究成果の概略を執筆いただきましたので、ご紹介いたします。



## オーバレイネットワークにおける 自律分散型トラフィック制御機構の研究



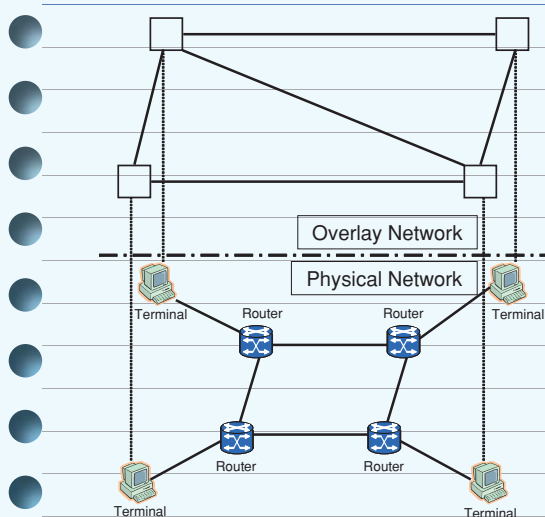
京都大学 大学院情報学研究所 システム科学専攻 准教授 **笠原 正治** Shoji Kasahara

近年の基幹網の高速大容量化やアクセス系の多様化に伴い、大容量、高品質の通信を行うサービスが増加してきています。これらのサービスの通信品質を高度に保証するネットワーク技術として、トランスポート層より上位のレイヤで通信制御を行うオーバレイネットワークが注目を集めています。オーバレイネットワークでは、端末同士を論理的なトポロジーレベルで接続することにより、負荷の分散やアプリケーションレベルの通信品質の向上を目指しています。しかしながら、ピア・ツー・ピア (peer-to-peer: P2P) ネットワークのファイル共有サービスにおけるエンド・ツー・エンドのファイル転送遅延は、オーバレイでの制御だけでなく物理ネットワークトポロジーにも大きく依存しております。オーバレイネットワークに関する従来研究では、論理網レベルにおけるピアの挙動を考慮した性能解析が行われていますが、論理網と物理網のインタラクションを考慮した性能解析研究は取り扱いの困難さのため、ほとんど行われていませんでした。

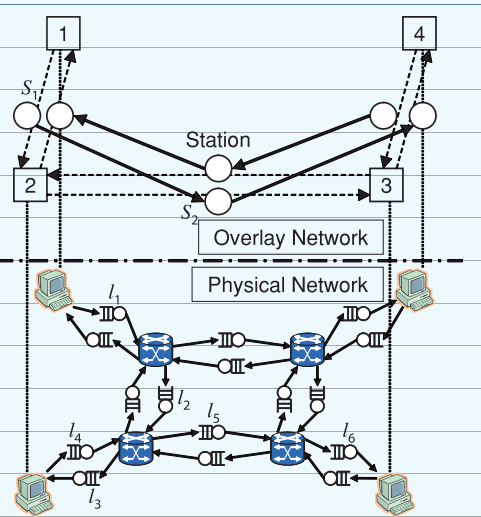
そこで本研究では、オーバレイネットワークにおける物理トポロジーと論理トポロジーのインタラクション効果を定量的に把握するため、4ノード・4ルータで構成される物理ネットワーク上で、4ノードが論理ネットワークを構成するオーバレイネットワークに着目し、待ち行列網理論を用いてエンド・ツー・エンドのファイル転送遅延の理論解析を行

いました。ここでの工夫は、2層構造のネットワークを統一的に取り扱うフレームワークを用いて論理網レベルの経路制御と物理網レベルの経路制御を独立に取り扱い、ノード毎の系内パケット数を状態とする定常分布を積形式解表現で与えたところにあります。数値実験をトポロジーの組み合わせに対して網羅的に行った結果、物理トポロジーと論理トポロジーが一致する場合にファイル転送遅延が小さくなる傾向にあること、論理ネットワークのトポロジーによっては、物理トポロジーに関係なく負荷に対して遅延が急激に増大することが明らかになりました。また、ネットワークシミュレータの ns-2 を用いた評価結果と比較することにより、理論モデルの有効性を確認することができました。この理論モデルをさらに拡張し、フラッシングによる検索処理を含めたファイル共有サービスについても評価を行うことができました。本研究の成果はオーバレイネットワークの経路制御法を確立する上で有用な指針を与えることができると考えられます。

最後になりましたが、この度、本研究を KDDI 財団優秀研究賞の対象研究としてご選考頂きましたことに対し、KDDI 財団関係各位に心より厚く御礼申し上げます。今回の受賞を励みとして今後さらに研鑽を重ね、情報通信にかかる基礎理論の発展に少しでも貢献できるよう努力していきたいと思



図：4ノード・4ルータオーバレイネットワーク



図：2層型待ち行列網モデル



# 電波防護ガイドラインの 工学的根拠に関する研究



名古屋工業大学大学院 工学研究科 准教授 **平田 晃正** Akimasa Hirata

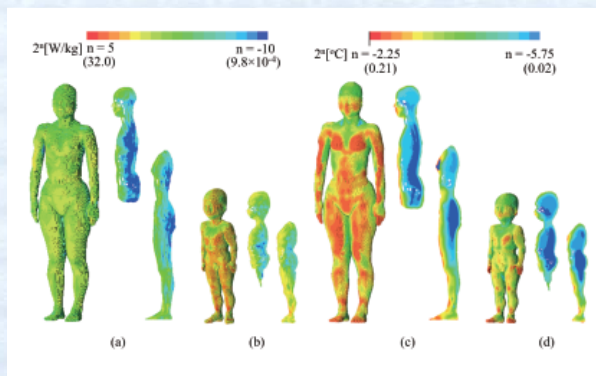
ユビキタスネットワーク社会の到来により、無線通信で用いられる電波の人体影響に対する関心が高まっています。強度の弱い電波でも長時間のばく露（注：電波にさらされること）となれば、影響があるのではないかとという考えもあり、電波の利用形態に応じた長期ばく露に対する疫学調査が行われています。2010年5月に国際がん研究機関は、携帯電話の長期使用による神経腫瘍や髄膜腫に対する国際疫学調査の結果を発表し、発生リスクの増加は見られなかったとする一方で、累積通話時間が1640時間以上のグループ（1日あたり30分の通話に相当）についてリスク増加が見られたものの、様々な誤差要因を考慮するとリスク増加があるとは断定できないと結論づけています。つまり、携帯電話などが用いられる周波数帯における確立した電波の生体影響は、電波吸収に伴う熱作用が支配的であるという従来の知見に変化はありません。なお、国際非電離放射線防護委員会によるガイドラインでは、100kHzから10MHz程度の周波数を境界に、低い周波数帯では刺激作用、高い周波数帯では熱作用という短期的なばく露に対する防護を目的に作成されています。

国際ガイドラインではばく露条件を2つに大別していますが、双方とも主に1970年代に実施されたげっ歯類などを対象とした動物実験の結果に基づいています。まず、携帯電話からの電波など、人体が電波に局所的にさらされる場合の安全性の指標としては「局所10gにわたり平均したSAR（単位体積当たりの電波吸収量）値」が用いられており、局所的な電波による加熱からの防護に相当します。一方で、基地局からの電波など、電波を全身でばく露した場合の安全性の指標としては「SARの全身平均値」が用いられており、体内深部における温度変化からの防護に相当します。後者の根拠は、SARの全身平均値が一定以下であれば影響は見られないという事実に基づきますが、個体差も小さくありませんでした。従って、電波ばく露に伴う体内深部の温度に関連すると考えられるものの、それが「体温」なのかあるいは「体温上昇」なのかも十分検討がなされているとは言えないのが実情でした。本研究は、後者の「全身でばく露した場合」に着目し、工学的見地から電波防護指針の根拠の更なる明確化を目指したものです。

人体に対する電波ばく露実験が倫理的に困難であることから、家兎を用いたばく露実験を実施し、電波ばく露に伴う体内温度を測定し、電波に伴う支配的要素は「体温上昇」であることを明らかにしました。また、動物実験における結果との比較より、体内深部温度を時間的に追跡可能な大規模電磁界・熱統合解析手法を開発しました。なお、体内深部温度上昇を解析することは極めて困難とされていましたが、

熱解析において熱力学第一法則を満たすように簡易な式を一つ加えることで、解析が実現できることを示しました。この解析手法を用いて、電波を人体に照射した際のSARの全身平均値と温度上昇の定量関係を明らかにしました。この際、人体モデルとしては、情報通信研究機構が構築した分解能が数ミリメートル、考慮した組織数が50を超える日本人を対象に構築したものを用いました。主な結果として、現在の電波防護指針で用いられている推奨値の範囲内であれば、職業人に対する最悪の場合を考えても体内深部温度上昇は0.1℃程度であり、1日における深部温度の変化（おおよそ1℃）に比べて十分小さいことを示しました。また、ヒトは発汗機能が高いため、小動物に比べて電波による温度上昇は小さいことを明らかにしました。さらに、小児に対する影響にも着目されており、国際非電離放射線防護委員会では小児の電波吸収量は成人に比べて高くなることを指摘しています。一方で、本研究では、成人と小児の形態的な相違、具体的には体表面積を体重で除した値の相違により、小児の温度上昇は成人に比べて小さいことを明らかにしました（図参照）。一連の成果は、国際非電離放射線防護委員会が出版した研究成果のレビューなどでも取り上げられており、当該分野における今後の国際標準化にも大きな影響を与えることが期待されます。

最後になりましたが、今回本研究がKDDI財団優秀研究賞を受賞したことを大変光栄に思っております。研究助成を頂いた財団の関係各位、共同研究者・藤原修教授をはじめとする本研究に協力していただいた皆様に感謝申し上げます。



図：第3世代携帯電話の周波数を浴びた場合の吸収電力分布と温度上昇分布：

(a) 成人女性における電力吸収分布、(b) 3歳児における電力吸収分布、(c) 成人女性における温度上昇分布、(d) 3歳児における温度上昇分布



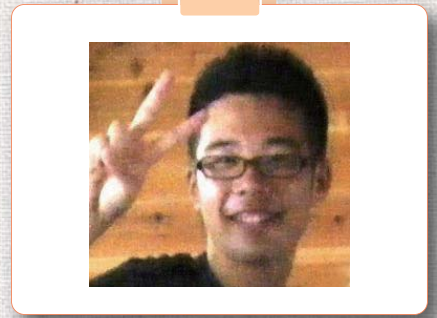
助成・援助対象者からの報告

## 社会的・文化的諸活動助成 ①

# つながるきもち ～ボクとキミとの架け橋に～

CSN浜松 (College Student Network for community service in Hamamatsu) 代表  
(静岡大学情報学部情報社会学科3年)

川村 卓也 Takuya Kawamura



### >>> きっかけは、たったひとつの想いから

「地域がかかえる問題を、おなじ地域に住む大学生として放ってはおけない!!」—— 私たちCSNを誕生させたのは、たったひとつの、熱く大きな想いでした。

私たちが暮らす浜松市は、総人口の3%以上が外国人という、全国的にも特殊な状況を抱えています(全国平均は約1.7%)。「国際交流」「国際協力」という言葉がなじみ深いものになった現在ですから、一見すると、この数字はいたって普通のもののように感じられるかも知れません。しかし、おなじ浜松市民であるにも関わらず、彼らと私たちの生活環境にはあまりにも大きすぎる「壁」が立ちはだかっています。労働環境・就学状況・経済規模・コミュニケーション——何もかもが別世界といってもいいでしょう。予てから市役所を中心にあらゆる対処がなされてきましたが、低迷する景気の影響などもあってか、なかなか思うように支援は広がりません。あらゆる夢を持って、わざわざこの浜松へと来てくれたにも関わらず、お互いの距離はまだまだ離れたままです。

——だからこそ、CSNは立ち上がりました。「お金も知識も時間も限られている大学生であっても、必ずできることがある!!」という信念のもとに。

### >>> おにいさん・おねえさんとして

今回、助成金をいただくことになったのは「アンダーニャ教室」という外国籍児童学習支援活動です。週に一度、湖東・浜北・高丘という3団地で集会所を借り、勉強や遊びをともにしています。季節によってはクリスマスパーティを開催したり、3教室合同で遠足に行ったりと、ただ机に向かうだけではない活動にも力を注いでいます。子どもたちの就学問題改善と地域ネットワークの活性化を目指し、設立当初からずっと受け継がれてきた活動です。

先述のような状況のなかでも、子どもの就学問題は特に深刻な状態にあります。日本人の就学率がほぼ100%であるのに対し、外国籍児童の就学率は70%程度にすぎません。頼みの綱でもあった外国人学校なども、昨今の不況によって閉鎖を余儀なくさ



れ、これから就学率はますます低下することが予想されています。また、たとえ学校に通うことができたとしても、言語や文化などのコンプレックスから、満足に勉強もできず、友だちもできず、ひとり残されてしまうことも十分に考えられるでしょう。ただ単純に環境を整えるだけでは決して解決しない、非常に複雑で難しい問題だからこそ、私たちにできることが数多くあるはずなのです。

それぞれの教室では、毎日いろいろなハプニングも起こります。宿題を持ってこない子どもがいたり、喧嘩を始めてしまう子どもがいたり、教室内ではしゃぎまわってしまう子どもがいたり——元気いっぱいの子もたちをまとめることは、決して簡単なことではありません。しかし、そうしたエネルギー

が、徐々に自分たちの心を成長させる肥料となり、やがては国籍や世代を越えた、かけがえのないつながりが生まれます。素直に話し、素直に怒り、素直に泣き、そして素直に笑う姿が、ともに過ごす時間の意味を強く意識させてくれるはず

です。

学習支援という活動は、非常に堅苦しく遠回りなものに思えるかも知れません。しかし、教室の目標は、決して子どもたちの成績をアップさせることではありません。子どもたちを学校に行かせることだけが目標というわけでもありません。ただ純粋に「学校に行き、友だちと一緒に勉強する楽しさ」を感じてもらうことが最大の目標です。家庭教師のような感覚ではなく、まるでひとりの「おにいさん」「おねえさん」のように接してあげることで、子どもたちの心を解きほぐし、距離を縮めることができます。家庭の経済的事情など、私たちの力では到底解決できないような問題にいきなり飛び込むのではなく、私たちにできる役割を果たすことが、第一歩なのだと思います。

「国際交流」という言葉は、あまりにも広く大きな視野を持っていることでしょう。そのため、私たちはなかなか具体的な行動に踏み切ることができないのかも知れません、それは実は私たちにとって、とても身近なものであるのではないのでしょうか。目に見えるような結果を残すことも、それはそれで実に大切なことですが、その基盤となる「心のつながり」

を育てることも、ひいては「国際交流」と考えることができるのではないのでしょうか。

この教室が、これからもずっと心の育つ場所であってほしいと思います。



## >>> 想いは世代を超えて ～ボクとキミとの架け橋へ～

2001年に開始したCSNの活動も、いよいよ今年で10年目を迎えます。先輩方が描いた夢は、世代を超えて、今のメンバーにも確実に受け継がれてきました。

設立当初は、外国人の方々だけが支援の対象でした。しかし、活動の幅が広がるに連れて、大学生の力だけでは改善できない問題にも数多く直面してきたことも事実です。ただ彼らの環境を変える努力をするだけでは、「お互いの」距離を近づけることは出来ません。おなじ浜松に暮らす住民として、各々の想いが地域全体に根ざし、一人ひとりが積極的に歩み寄っていくような——そんなネットワークが、浜松では必要とされているのです。

今では外国人に限らず、地域の子もたち全体を支援するような活動も、いくつか展開しています。地元企業の協力の下で親子ものづくり教室を開催したり、公民館の講座を受け持ったりなど、より広いネットワークを作ることが、ひとつの目標となりつつあるのです。もしかすると、10年前に先輩方がイメージしていた活動からは、次第と方向性が変わってきているのかも知れません。ただ、「心を育てるボランティア」という意味では、これまでも、そしてこれからも、ずっと受け継がれていくはず

です。最後になりましたが、「アンドリーニャ」とは、ポルトガル語で「ツバメ」のこと表します。ツバメは旧浜松市の鳥（現在はウグイス）であり、また、海を大きく越える渡り鳥でもあります。浜松全体が、海・空・大地——そしてひとの心を越えて。それぞれの心に架け橋がかかるようにという想いが込められています。私たちの想いがいつか、市民のみなさんや、一緒に活動してきた子どもたちへと根付き、そこからまた新しい活動が生まれていきますように……





助成・援助対象者からの報告

## 社会的・文化的諸活動助成 ②

# アジアの人形芝居の伝統と現代、 そして未来へ

～カンボジアの影絵芝居日本公演とその後～

財団法人現代人形劇センター 理事

塚田千恵美 Chiemi Tsukada

(写真左：カンボジアの若手座長一家といっしょに)



1993年からアジアの人形芝居の招聘を毎年続けています。多くの方にはなじみがないかもしれませんが、実はアジアは人形芝居の宝庫。古くから、各地で大衆的な人気を得て生きてきました。どれもその土地の美術、音楽、文芸など芸術や精神世界が結晶していて、アジアの人々を知るためにとても有効なアイテムなのです。これまでに、インドから東南アジア、中国にいたるまで、8地域、13種類の異なる芸能を招聘しています。

最初に心惹かれたのは、現代にも刺激的なその表現のパワーでした。地から湧いてくるかのような語りの声とパーカッション、鮮烈な色や形、劇場にはない「場」のエネルギー……

そして17年。その魅力はいまでも健在とはいえ、この間にテクノロジーや経済の発展により、基盤となる地域共同体のあり方が変わり、世代交代が進んで、人形遣いたちの苦闘ぶりを身近で見えるようになりました。そしてパワーの源泉と感じられた、人知を越えた力を畏れ、信じる心も、衰えをみせているように感じられます。

2009年にKDDI財団(ICF)の助成を得て行った「カ



上演風景(2009年日本公演より) © 古屋均

ンボジアの影絵芝居「スバエク・トム」日本公演は、そうした困難と同時に希望をも感じさせてくれるものでした。

### >>> カンボジアの影絵芝居の魅力

カンボジアの影絵芝居は、アンコールワットを擁するシムリアップ地方で演じられてきた、国を代表する伝統芸能です。1970年から二十余年におよぶ内戦で壊滅的な打撃を受けましたが、戦後みごとに復興を果たしました。現代人形劇センターでは1997年にすでに1回目の日本公演を実施。その後も折りにふれて活動に接してきました。

では、この影絵芝居はいったいどんなものなのでしょう？その特色はまずスケールの大きさです。スクリーンは幅10m、高さ5m。影絵人形はゆうに高さ1.2mを超え、人形遣いはこれを掲げ、全身をスクリーンに映して優雅な身振りをみせます。光源は椰子の殻を盛大に燃やしてつくる大きな篝火。そして影絵の常識を破り、幕の前後で交互に演技する演出など、世界的にも異彩を放つ芸能です。さらに貴重なのは、その底流にいまでも色濃くのこる深い精神性です。上演の前には必ず主要な神々と芸道の祖先への、敬虔な祈りの儀式が行われ、演技には、極度の集中力、つまり一種の瞑想状態が必要とされています。

最初にこの影絵の調査に入ったのは、復興途上の1994年でしたが、そのときすでに複数の座が活動を再開するも、伝承の中心にいる長老ティー・チアンの一座は人形を失い上演不能に陥っていました。



それでも賢者の風格をそなえた長老の存在感はただならぬものがありました。なんとか上演を実現したくて、3年後に弟子筋である国立影絵劇団との合同日本公演を企画しました。事前に3週間の合宿稽古を重ねての来日でした。

日本公演では、長老のこだわりで、上演前の祈りの儀礼に公演時間90分のうち、実に15分を費やしましたが、長老の朗唱につれて会場内に神々が降りてくるような、荘厳な空気が立ちこめたことでした。そして深い精神性に貫かれた日本公演は、カンボジアの復興の息吹を伝えるものとして、大きな反響を呼びました。

### >>> 受け継がれる精神性

2009年、12年後の今回、日本公演の座長は孫のチアン・ソパーン、30歳です。

日本公演後、長老の一座は助成を受けて自前の影絵をもち、近所の青年たちを集めて練習も開始され、日本人研究者が弟子入りし支援者となるなど、活動に弾みがつきました。しかし、長老は2000年に死去。大阪の国立民族博物館による、伝統的な7日7夜の上演の記録撮影が終わった直後のことでした。チアン・ソパーンはその後を継いだのです。

いまや首都プノンペンでは、時代にあわせた新手法や新作を上演するグループが生まれていますが、幼い頃から祖父を尊敬する彼は、その様式と演技、そして精神にこだわって、本来のゆったりと流れるような典雅な伝統影絵芝居を演じ続けています。

その彼のこだわりを生かし、今回の公演には、もっとも重視される最終章をプログラムに加えました。この章では、主人公ともいえる英雄が死を覚悟して出陣する場面で、演技を中断して、演技者全員で天界への蘇りを祈るという儀式が行われます。この儀礼を生半可に行うと不吉なことが起こると信じられていて、いまもリハーサルではけっしてやりませんし、畏れるあまり上演そのものが希で、今回も実に9年ぶりのことです。座長ばかりか、十代から三十代の若い世代が半数以上を占める一座ですが、この場の彼らには緊張がみなぎり、観客ははからずも死者を送る場に共に参加する形となって、祝祭的な空気が会場を満たしました。まさに長老ティー・チアンの精神が息づく上演には、影絵芝居のエッセンスと魅力を伝え、演劇の可能性を再発見させられた、という声も寄せられました。



祈りの儀礼 © 古屋均

### >>> 悩めるアジアの人形遣いたちのネットワークを

さて帰国後の一座ですが、現地での環境は厳しく、上演は年間10回余り。伝統的な上演の場である祭礼や仏事では行われず、アンコールワットを訪れる外国人観光客向けに機会をみつめています。2005年にはユネスコの「無形文化遺産」の宣言を受けましたが、国内での認知度はいまだ低いままです。日本公演によって座員のモチベーションは上がったようですが、財政的な事情から、定期的な練習は途絶えがち。座長は影絵製作で生計を立て、どうにか活動を支えています。若い座長の悩みは深いのです。

現代人形劇センターでは従来の招聘公演に加えて、近年「アジアの人形芝居交流ワークショップ」を始めました。冒頭に書いたように、カンボジアの問題は一例にすぎません。悩みを抱えた人形遣いたちが集まって、お互いの芸能を学び、活動についての情報交換をするための試みです。2007年、2010年の2回実施し、カンボジア、ラオス、ミャンマー、そして日本の人形遣いが参加しました。しだいにそれぞれの指導は厳しさを増し、お互いの表現の共通性も意識され始めました。現地での普及活動のヒントになればと、日本の子どもたち向けのワークショップも研修プログラムに加えています。

カンボジアの若手座長も、頑固なはにかみ屋から変身をとげ、伝統様式だけでなく、他国のメンバーと一っしょに新しい試みにも、積極的にチャレンジするようになりました。帰れば現地では変わらぬ厳しさが待っています。悩みは続くことですが、ここでの刺激が、座員みんなにも伝わって、元気に繋がることを願ってやみません。回を重ね、参加国を広げ、いずれは一っしょになにかがつけられるような、そんなゆるやかなネットワークができたらと、密かに夢見ている昨今です。

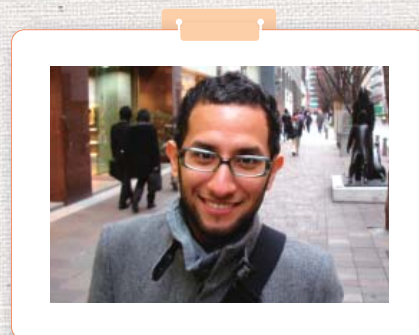


# On the Importance of Access to Good Education

東京工業大学 情報理工学研究科

Luis Ricardo Sapaico Valera

Peru



Student life is over. I have been a student for so long that it is hard to say good-bye. Honestly speaking, I do not think I will ever stop being a student, because there is so much to see and so many people from whom to learn. In any case, a completely new experience is to start for me soon, and I am sure I am ready for the challenge. How can I be sure? It is simple. It is because I have been privileged with top-level education throughout my entire life. I have been given the chance to learn and I will continue learning once University is over. While being abroad, I have come to realize the effect of education in the development of a society; hence, in the following lines I will introduce the education system in my home country, Peru, and point out some issues that need to be solved if we want a brighter future.

## >>> Education System in Peru

There are three levels of education, the Primary school, the Secondary school and the University studies. Normally, kids would enter the Primary school when they are 5 or 6 years-old; and this period lasts six years. Practically all

schools offer the chance to pursue the Secondary studies at the same place. Therefore, most of the kids would start the Secondary school at the same place where they finished the Primary. Different from Japan, there is only one Secondary school that lasts for five years. This means that it takes 11 years to complete the school. Consequently, teenagers would graduate from school when they are 16 or 17 years-old.

A part of them would enter to University and receive higher education. All careers require to be enrolled for five years (or 10 semesters), except Law and Medicine. Thus, theoretically, youngsters should be graduating when they are 21 or 22 years-old. However, the evaluation for many of the lectures is very strict and it is not rare to fail a course. Unfortunately, there are some "key" courses that you cannot fail because they allow you to take more advanced courses. Hence, if you do not pass them, you are forced to stay for one more semester. As a result, it is not surprising that a considerable amount of students are graduating from University when they are 23 or 24 years-old.

Upon graduation, only a minority would continue Post-graduate studies. There are very few options in the



Graduation from School



Graduation from University

science field, so most of them would try to study abroad. On the bright side, there are many scholarships available. However, the competition is tough and only a handful of people are selected each year. Research is not something that is done, and the concept of students belonging to a "Laboratory" that is in charge of a Professor is almost non-existent.

As a side note, there are approximately 30 Universities in Lima, the capital city, which hosts about one third of Peru's 27 million-people. According to the 2007 Census, approximately 9% of the population is between 15-24 years-old. This means that about 700 thousand young people would need to be distributed in 30 Universities, have all desire to pursue a higher education.

## >>> Education: Current Situation

For the amount of people who are in the age suitable for continuing higher studies, the number of Universities in Lima is not enough. Given that a significant part of the population cannot afford to study in private Universities, classrooms in public facilities are frequently overcrowded, which in turn increases the load on the Professors and restrains them from giving a more personalized education.

Being a teacher, thus, is not an easy task. If we add that the salaries in public Universities are not good enough; no wonder there exists a lack of willingness to become a public high-education teacher. As a result, although there are people who would love to teach and guide younger spirits, frequently they choose not to. Consequently, public education in Peru is regrettably of poorer quality than private, because teachers are not sufficiently motivated. Moreover, teachers are often not well appreciated. Thus, students, who in the future should take the post and become teachers of new generations, do not consider being a teacher as a viable option for a successful life. It is imperative that this circle be broken.

Investing money in good education is the most logical solution if we want the country to have a brighter future. Currently, the Public expenditure on education in Peru is 2.7% of the GDP; while in Japan it is 3.5% of the GDP. If we consider that the GDP in Japan is four times that of Peru; then the difference is vast.

Similarly, it is necessary to encourage kids to study. I cannot image how many bright minds are being wasted just because they cannot find proper guidance that allows



My Favorite Park in Tokyo. Shinjuku Gyoen.

them to successfully channel their ideas. In Peru, only 75% of kids are enrolled in Secondary school, and this rate drops even further since only 31% of Peru's youth continue to University studies. Additionally, not everyone is able to graduate and obtain a Bachelor's Degree. Furthermore, pursuing post-graduate studies in the science field is rare, probably because most people just want to find a job upon graduation. And most jobs do not require you to have a Master's Degree (even less a PhD.).

## >>> Conclusion

Peru is a young country, with an average population age of 28.4 years. Although public Universities are free, a big part of the population is still unable to access to higher-education. Even so, in some cases the education given is not adequate, and chances for contributing to the society are further reduced. There are plenty of Professors who love what they do and try to instill these values on young minds; however, the percentage is still low.

I wish for the day when Peru's young minds are given the opportunity to develop their abilities, thus building a better society, more just and more equal to everyone. It is about time for the Peruvian government to become aware of the importance of education, and the benefits it will bring on the long-term to the country. From my personal experience in the science field, I can say that once I have left the country it is very hard to come back, knowing how little support research gets. After all, obtaining a PhD. means that, apart from teaching, you are eager to continue doing research. Unfortunately, I cannot do that in Peru. However, I am looking forward to the day when I can honestly say that I want to come back and help students to stimulate their thoughts and ambitions.



# Bonds between Egypt and Japan

東京大学 工学系研究科

Eid, Mohamad Samir Abdelrahman

Egypt (写真右)



Strong bonds have always combined between Egypt and Japan. The relationships between both nations span over a wide range of strong mutual cultural interests and curiosity, economic cooperation and development projects. Let's take a brief overview over some of the examples for such cooperation.

The Cairo Opera House in central Cairo is one eye witness on such bonds. The corner stone of the new Cairo Opera House was laid in March 1985, which was later built with the support of JICA, the Japan International Cooperation Agency. The Ministry of Culture in Cairo at that time and the JICA created a design that is inspired by the traditional Islamic architecture and that could blend with the surrounding buildings in harmony. In October 1988, President Mubarak and His Highness, Prince Tomohito of Mikasa, the younger brother of the Japanese Emperor, inaugurated the National Cultural Centre "Cairo Opera House" in a remarkable ceremony. It was the first time for Japan to stage a Kabuki show in Africa or the Arab World. Thus, the joint cooperation between Japan and Egypt has given rise to a unique landmark of aesthetic and cultural interest.



Views of the opera house

As for cooperation in the business sector, an interesting example to mention here is El-Araby Group, one of the largest industrial & commercial corporations in Egypt. It is a conglomerate of seven industrial, commercial & service companies. In 2009, its Total Sales crossed 3.8 billion Egyptian Pounds, contributing significantly to the overall growth of the national economy. El-Araby Group was established in 1964 which started initially with hardware and toys manufacturing. In 1974, they began to expand through importing Japanese electronics such as SANYO black-and-white TV sets and Toshiba fans and radio-cassettes. The group acknowledges the strategic significance of Japanese products on El-Araby history especially after signing a contract of commercial agency with Toshiba in 1975. Later in 1985 the company started a Toshiba TV sets assembly line, in cooperation with Toshiba. It was the first Japanese product to be assembled on the Egyptian soil, and in the Arab world. Thereafter in 1992 the investment was increased in export by acquiring the SEIKO watches franchise, in the same year, El-Araby started to cooperate with ALBA, becoming the only agent for both SEIKO & ALBA in Egypt. Now El-Araby is a major player in Egyptian industry with multiple large factories, producing; TOSHIBA 29-inch TV sets, Refrigerators (with a production capacity mounts to 250,000 units a year), super-flat screen Toshiba TV (production capacity that mounts to 300,000 units a year), Sharp air conditioners, which is the second factory all over the world to the plasma cluster technology to purify air (production capacity of 140,000 units a year), lamps (production capacity of 6 million units a year), Toshiba Regza TV sets, Sharp Refrigerators, and assembling Sharp photocopier. El-Araby today is manufacturing, marketing and exporting a range of more than 345 world-first class products. By the end of 2010, total employee numbers reached a figure of over 15,500. While this Egyptian

industrial giant is a source of pride for every Egyptian, it can also become a source of inspiration for every businessman in both countries.

On the Infrastructure level, consider the Suez Canal Bridge, also known as the Egyptian-Japanese Friendship Bridge. The bridge links Africa with Asia across the Suez Canal. The bridge also links between Cairo and Tokyo, in terms of friendship. The bridge was built with assistance from the Japanese government. The contractor was PentaOcean Construction, a major Japanese construction firm. The Japanese grant, accounting for 60% of the construction cost (or 13.5 billion yen), was agreed to during the visit of the President of Egypt to Japan in March 1995, as part of a larger project to develop the Sinai Peninsula. Egypt bore the remaining 40% (9 billion yen). The bridge opened in October 2001. The clearance under the bridge is 70 meters, which defines the admissible maximum height of 68 meters above the waterline for ships that can pass through the Suez Canal. The bridge is 3.9 kilometers long, consists of a 400 meter cable stayed main span and two 1.8 kilometer long approach spans. The height of the two main pylons supporting the main span is 154 meters each. The towers were designed in the shape of Pharaonic obelisks. More infrastructure projects include also developing water supply projects in Egypt.

On the academic level, consider the Egypt-Japan University for Science and Technology (E-JUST). E-JUST is a research-oriented university with a Japanese style approach under the cooperation of Japanese Government, and is the only Egyptian national university that has a foreign country's name in its name. E-JUST is expected to become a central educational hub in the Middle East and the Arab region. Japan's cooperation for this project consists of assistance for formulating a grand design and curriculum and managing the whole system of E-JUST. In this context, Japan dispatches specialists and core professors to E-JUST.



E-JUST logo  
(Homepage <http://www.ejust.edu.eg/>)

E-JUST has just started accepting its first students and conducted lectures since February 2010. On the occasion of the inauguration ceremony of E-JUST,



The Inauguration Ceremony of Egypt-Japan University of Science and Technology (E-JUST) and Signing of the Agreement between the Government of Japan and the government of the Arab Republic of Egypt Co-operation in Science and Technology.

the signing of the "Agreement between the Government of Japan and the Government of the Arab Republic of Egypt on Cooperation in Science and Technology" took place between Dr. Hany HELAL, Minister of Higher Education and State for Scientific Research, on the Egyptian side and Mr. Kaoru ISHIKAWA, Ambassador of Japan to Egypt, on the Japanese side. The Agreement reflects remarkable recent development of the cooperation in science and technology between Japan and Egypt.

So we had a general idea on the relations between Egypt and Japan Culturally, Economically, Financially, and Academically. I believe several other cooperation chances are so clear but still untouched, especially in the business sector. For example, Egypt for Japan can become a very convenient stepping stone towards the European market and the Middle East. With its optimum location, inexpensive labor, immense human resources, both countries can benefit from their mutual advantages achieving the good for both the Egyptian and the Japanese people. It is obvious now after you read this article why I came all the way to study in Japan. Simply, my plan is to know more about this country, and to become a gear in the Egypt-Japan cooperation vehicle. After returning to Egypt, I will make full use of the experience I gained here to help my country advance and also promote the ideas of cooperation between both nations. I have more feelings in my heart towards Japan, though there is no space to express all of it here.

I would like to hear your feedback on:  
[eid.msa@acm.org](mailto:eid.msa@acm.org)





# A journey from a rural village of Sri Lanka to Japan

長岡技術科学大学 工学研究科

Amaratunga, Tharanga Sandaruwan

Sri Lanka



I was born in Polonnaruwa which is around 300Km away from the capital of in Sri Lanka. I was lucky to have three elder sisters to look after me other than the parents. At the age of ten, I left the village to enter 'Maliyadeva' college, which was a popular school in Sri Lanka. Since the school was around 100km away from my home, I had to stay at one of my relative's house. It was little hard for me to stay away from my parents and sisters at the beginning, but gradually I used to it.

I made lots of friends at school and enjoyed my school life very much. In 2004, I could enter the University Of Moratuwa Sri Lanka which is one of leading technical universities in the country. That was a big achievement in my life at that time. In the very first year I entered into the university, Sri Lanka was hit by the worst disaster in the history of it; the Tsunami that killed more than sixty thousand and left many thousands homeless. Like every other youth in the country, I too came up to assist the affected people in my capacity together with my friends in the university. In the next year I was elected as the president of the students' union of the faculty of IT of university of Moratuwa. By the time I graduated from the university in 2007 I had found my life time partner too.



I was lucky to join the largest IT Company in the country, the Virtusa Corporation in Sri Lanka on the very next day I was graduated from the university as a BSc.IT graduate. I worked there 1 ½ years as an engineer before I came to Japan on 1st April 2009. While I was working fulltime at Virtusa Corporation, I taught web technologies in one of vocational training institutes in Sri Lanka.

I entered the Nagaoka University of Technology in April 2009 for doing my masters degree. From the day I landed to the Japan soil, I loved it very much. I found

it a completely strange place. I could hardly understand any Japanese other than " Ohayoo Gozaimasu" and " Arigatho Gozaimas". But gradually I could catch up the language. In early days at the university I faced a funny problem when I went to have my lunch at the university cafeteria. I had to go along a queue and pickup items I like to eat. Sometimes, they ask me whether to give this and that. I didn't understand their Japanese at all, and I used to say " HI" to anything they say. So, they put many items on my tray and I have to pay for those items too, whether I ate them or not. Other challenge I faced at the cafeteria is using the pair of chopsticks. I had never used chopsticks in my country before coming to Japan. So, I had to spend around an hour to eat my lunch. Those are the interesting memories of my life in Japan.

I came to Japan without any scholarship. So, it was difficult for me to earn for both the tuition fees and living expenses. First year, I managed to pay the tuition fees with the support I received from my professor. I applied for a KDDI scholarship in the next year. I was lucky to get selected for receiving that scholarship. Actually, I'm grateful to the KDDI foundation for that immense support extended to me. The amount I received from KDDI foundation was quite enough for me to pay the tuition fees and live a comfortable life here in Japan.

In September last year, I got married. And, now I'm here with my beloved wife Thilini. I'm graduating in the march of this year. Currently, I have planned to stay another year in the university as a research student. In the coming year I'll be deciding whether to do a doctoral course or go to industry. The decision will depend on many factors. However, I want to go around the Japan and feel the beauty of it fully, before leaving Japan.

「青少年のための理科実験教室」は、毎年夏休みに、東北大学、名古屋大学、九州大学でそれぞれ趣向を凝らして開催されています。今回はその中の1つ、東北大学での様子をご紹介します。

# たのしい サイエンス・サマースクール

東北大学大学院工学研究科 教授

澤谷 邦男 Kunio Sawaya



たのしいサイエンス・サマースクールは、「最近の若年層の理工系離れに対する一つの対策として、手作りの実験を通して児童・生徒に科学のおもしろさを体験させる」ことを趣旨として、KDDI財団(旧ICF)からの助成を受け、1994年以降毎年開催されている科学実験教室です。東北大学、東北学院大学、東北工業大学、宮城教育大学、仙台高等専門学校および日本工業大学の電気・情報系教職員の有志が構成する「たのしい科学企画委員会」によって企画・運営されており、本年度は2010年8月3日(火)から8月5日(木)までの3日間、42名の中学生が参加して東北大学工学研究科創造工学センターで行われました。

本年度は「光とロボット」をキーワードとして、光の信号でロボットを制御する実験、光の点滅と混合を利用して空中に絵を描く実験、光センサを使って紙に書かれたラインに沿ってロボットを移動させる実験、アンテナを使った電波の実験、太陽光発電を用いたソーラーヘリコプターの実験、磁石と巻き線による発電実験を行いました。各テーマともに自分の手で作製し、得られた結果を考察して改良するような実験内容となるよう工夫を行ったため、高度な内容を含むにもかかわらず、すべての生徒が最後まで興味深く熱心に実験を行っていました。

実験と並行して、東北大学電気・情報系の研究室を訪問しました。プラズマ、信号処理、画像認識、音声処理など中学生の関心の高い技術や身近な問題として認識されている

内容であったこともあり、生徒も熱心に見学し質問も活発に行われました。また、実際に研究活動を行なっている教員や大学院生との交流を図る意味でも大いに有用でした。

最終日には、3日間の実験結果をまとめて成果発表会を行いました。大学のセミナーでの発表・討論形式に準じた本格的な形式のものであり、中学生としてかなり質の高いものでした。そして、閉校式では参加者全員に一人一人修了証書が手渡されました。

サマースクールに参加した中学生からは、参加して楽しかった、科学の実験が好きになったとの感想が得られ、「科学に対する興味」を持ってもらうという本スクールの目的が十分に達成されたと思われます。このような科学教室に参加するのが初めての生徒も半数近くいましたが、そのような生徒も積極的に実験に参加し、科学に対する興味や、学校とは異なる体験が得られたことへの喜びが感じられ、全員が次回以降も参加したいと答えていました。また、ご父兄の方々からも、感謝の言葉とともに、このようなサマースクールをさらに活発に行って欲しいとの意見が寄せられました。

最後に、サマースクールの開催をご後援いただき、積極的に支援していただいた関係各位の熱意に敬意を表すと共に、ご協力に感謝を申し上げます。

なお、本スクールの様子は <http://www.ecei.tohoku.ac.jp/sss/> でご覧いただけます。



財団の新しい国際協力活動として、途上国のデジタルデバイド解消を目指した貢献活動があります。2010年度は、過去の活動でカンボジアとフィリピンにおいて構築した無線 LAN システムの改善を行い、さらに現地でネットワーク運用技術などの講習会等を開催しました。ここでは、初めてカンボジアを訪れた財団のプロジェクト担当者の声をお届けします。

## プノンペンとカンダール州

財団法人KDDI財団 国際協力部 専任課長

大沢潤一 Junichi Osawa



### はじめに

タイ、マレーシア、シンガポールなどでの生活は経験しましたが、カンボジアは初めての場所です。諸先輩からの話で暑さは覚悟していましたが、思いのほか過ごしやすく日本の初夏のようなイメージでした。現地の方の話では、12、1月は一年のうちでは暑さは多少控えめな時期とのことでした。でも、一年を通してこんな天候では無いよと念を押されました。汗かきの私としては、下着や手ふきタオルを多めに持ったりと準備をしましたが、ほとんど必要有りませんでした。

### プノンペンとカンダール州の雰囲気

それぞれの町にはその町特有の雰囲気があります。バンコク、クアラルンプール、シンガポールなどの都市、タイのチェンマイ、マレーシアのクワンタンなどの地方。天候や気候、そして国民性から来るものでしょうか。

プノンペン市内の車やバイクの多さに都市の活気を感じ、プノンペン市から車で一時間程度のカンダール州では、広大な大地に自然を感じました。都市の雑踏と広大な自然の異なる雰囲気を一度に感じました。カンダール州の小さな村では、牛が道をゆったりと歩き、庭先では鶏が放し飼いられていました。子供の頃の日本の田舎の様な、ゆったりとした生活を思い起こしました。



カンダール州の夕日

### ふるさとへの思い

眼を閉じると思い出すのは、ふるさとの雪化粧した北アルプスの山並みと雪解けの水の流れでしょうか。カンボジアでは、カンダール州の広大な田んぼを見て、稲は刈り取られていましたが田植えの時期の緑、刈り取り前の黄金色の稲穂が思い起こされました。水量の豊富なトンレサップ川で漁師を見かけると、昼食や夕食で食べた、ナマズやウナギ、名前は分かりませんが、あっさりとしておいしかった白身の魚などの料理が思い起こされ、ふるさとの魚料理が懐かしくなりました。



トンレサップ川の漁師の舟

### カンボジアの人々

現地の方といろいろ接しましたが、笑顔の中に純粋・純朴さを感じました。プノンペンでアンテナ工事をしてくれた方、忙しい仕事の合間に笑顔を返してくれました。カンダール州のヘルスセンターで会った子どもには、じっと見つめられてこちらが恥ずかしくなっていました。東京ではあまり感じられなくなった、純朴な笑顔でした。

都会の日々の生活で無くしてしまっただけのものを見つけられた旅でした。



## その他の活動実績

海外研修	開発途上国の情報通信発展に寄与できる人材を育成するためにアジア太平洋電気共同体(APT)が主催する海外研修において、モバイル通信、ブロードバンド通信、情報セキュリティ等の研修コースを企画・実施。アジアの開発途上国から約50名の研修員を受け入れました。
カンボジア教育支援のためのチャリティコンサート	2011年2月9日、東京の紀尾井ホールにて通算7回目のコンサートとなる“チャリティコンサートクラシック 2011”を開催。チケットの収益金はすべて、カンボジアの学校建設にあてられます。また、2011年4月には、第6校目となる Chhuc Teac KDDI School の開校式が現地で執り行われます。
MCPC講習会	モバイルシステム技術検定試験1級、2級対策講習会を年2回(春・秋)開催。年間約300名参加。2006年からこれまでに約1,500名がこの講習会を受講しています。



## 2010年度 助成・援助対象者

2010年7月に受け付けられた「優秀研究賞」、「調査研究助成」、「社会的・文化的諸活動助成」、「外国人留学生助成」、「国際会議開催助成」の助成・援助対象者が11月の審査委員会の審査を経て、2011年3月8日の理事会において、次の通り決定されました。(所属・職位は受付時のものです。)

### ◎ 優秀研究賞

研究課題名	所属 / 代表研究者	表彰額(千円)
オーバーレイネットワークにおける自律分散型トラフィック制御機構	京都大学大学院 情報学研究科 准教授 笠原 正治	500
電波曝露による生体内電力吸収と温度上昇	名古屋工業大学大学院 工学研究科つくり領域 准教授 平田 晃正	500
合 計	2 件	1,000

### ◎ 調査研究助成

活動名	調査研究代表者	期 間	助成額(千円)
カーネル学習と超高分解能ビームフォーマ法	新潟大学 電気情報工学専攻 准教授 湯川 正裕	2011年4月1日～ 2014年3月31日 3年間	2,670
操作に対する習熟不要のジェスチャ情報端末	筑波大学大学院 システム情報工学研究科 知能機能システム専攻 教授 星野 聖	2011年4月1日～ 2013年3月31日 2年間	1,796
遠隔医療における法制度の限界とその対策	東海大学 医学部 教授 中島 功	2011年4月1日～ 2012年9月30日 1年6ヵ月間	2,586
情報通信技術を用いたBOP対象のソーシャルビジネス基盤構築に関する研究	九州大学 システム LSI 研究センター 学術研究員 大杉 卓三	2011年4月1日～ 2013年3月31日 2年間	2,680
超高密度光通信用CWテラヘルツ光源	東北大学大学院 工学研究科 知能デバイス材料学専攻 教授 小山 裕	2011年4月1日～ 2013年3月31日 2年間	3,000
協調分散アンテナネットワークにおける周波数領域適応アンテナアレーの研究	東北大学 工学部工学研究科 助教 彭 薇	2011年4月1日～ 2014年3月31日 3年間	2,990
ヘルスケアのための生体信号解析ネットワーク	東京大学 新領域創生科学研究科 人間環境学専攻 講師 小谷 潔	2011年4月1日～ 2013年3月31日 2年間	3,000
若者のオンライン行動に関する日英比較研究	明治大学 商学部 教授 村田 潔	2011年4月1日～ 2012年6月30日 1年3ヵ月間	2,538
合 計	8 件	21,260	

## ◎社会的・文化的諸活動助成

活動名	主催する団体名	実施時期 / 場所	助成額(千円)
アジア太平洋の先住民族の文化・資源管理法を記録した映像アーカイブ作成と教材の普及	特定非営利活動法人 アジア太平洋資料センター (PARC)	2011年4月1日～ 2012年3月31日 東京	875
ミャンマー聴覚障害児学校(ろう学校)教員への補聴システム技術支援プロジェクト	特定非営利活動法人 NPO アジアマインド	2011年4月1日～ 2012年3月31日 ミャンマー	875
私たちでつくる歌で覚える日本語教材-在住外国人と日本のこどもたちによる共同製作	CANTA PROJECT	2011年4月1日～ 2012年5月31日 群馬	875
UNHCR 国連難民高等弁務官事務所アーカイブのデータベース作成業務ボランティア	国際資料研究所	2011年7月1日～ 2012年4月30日 スイス、日本	863
日タイ協働による「日本に暮らすタイにつながりを持つ児童・生徒への母語支援」	日タイを言葉で結ぶ会 ラックバーサータイ(RPT)	2011年4月1日～ 2012年3月31日 横浜、タイ	805
朋友会リユニオンの旅 -私の日本夢旅行-	特定非営利活動法人 日中児童の友好交流後援会	2011年4月1日～ 2012年3月30日 東京、中国	788
多文化共生をめざす多言語メディアの制作と普及 -ラテンアメリカの文化交流にむけて-	特定非営利活動法人 おおた市民活動推進機構	2011年4月1日～ 2012年3月31日 東京、グアテマラ	788
情報通信を用いた日本とカンボジアの国際理解の促進とカンボジア国内の日本語教育向上	特定非営利団体 海外日本語学校支援 NPO	2011年6月1日～ 2011年11月30日 カンボジア、山形、宮城	753
『世界をつなぎ、親子の心をつなぐオノマトペ遊び』インターネット電子ブック出版事業	特定非営利活動法人 電子メディアと知識の箱デジコム	2011年4月1日～ 2012年6月30日 東京	725
第一回「世界の若者サミット-世界市民になるためのよりよい未来を求めて」	特定非営利活動法人 国際教育文化交流協会	2011年4月1日～ 2012年3月31日 兵庫、大阪、タイ	656
合 計		10 件	8,000

## ◎外国人留学生助成

研究課題名	所属・氏名	国籍	助成月数	助成月額(千円)
次世代動画画像符号化およびその応用に向けた高画質低演算量動画圧縮アルゴリズムの実現	早稲田大学大学院 情報生産システム研究科 蘇 佳 (Su Jia)	中国	12ヶ月	150
Wireless Sensor Network Design and Operations	東京大学大学院 工学系研究科 景 輝 (Jing Hui)	中国	12ヶ月	150
電子商取引と定式分配法の検討	東京大学大学院 法学政治学研究所 Udomsuvannakul Panupan	タイ	12ヶ月	150
スーダンの視覚障害者の高等教育機関における支援モデルの作成とアクセシビリティについて	筑波大学大学院 人間総合科学研究科 Bilal Salih Elser Hisham	スーダン	12ヶ月	150
Liberalization of Telecommunications Service Market in Vietnam: Toward Full Implementation of Vietnam's WTO communications	名古屋大学大学院 国際開発研究科 Dang Minh Chau	ベトナム	12ヶ月	150

研究課題名	所属・氏名	国籍	助成月数	助成月額(千円)
Efficient, failure-resilient semantic web service planning	東京大学大学院 情報理工学系研究科 Wagner Florian Stefan	ドイツ	12ヶ月	150
Development of 60 GHz CMOS Power Amplifier	東京工業大学大学院 総合理工学研究科 物理電子システム創造専攻 Kimurarsi Hamid	イラン	12ヶ月	150
An Annotated Linguistic Pre-processing System for Casual English (Natural Language Processing)	北海道大学大学院 情報科学研究科 Clark Eleanor Frances Margaret	英国	12ヶ月	150
Innovative Business Model approach for maximizing E-Commerce related Business Opportunities in Sri Lanka	一橋大学大学院 国際企業戦略研究科 Dahanayakege Aruna	スリランカ	12ヶ月	150
情報化社会における電子ガバナンスによる政府行政組織の内部改造、電子官僚制度 (Electronic Bureaucracy) 及び、政府行政組織の外部における各政府利益関係者の関係の変化	慶応義塾大学大学院 法学研究科 銭 子易 (Qian Ziyi)	中国	12ヶ月	150
合 計			10件	18,000

## ◎ 国際会議開催助成

会議名	主催団体名	開催時期	助成額(千円)
海中改訂工学に関する国際会議 海底ケーブルの科学利用に関する国際会議	東京大学生産技術研究所 東京大学地震研究 IEEE/OES、IEEE/OES Japan Chapter 海洋研究開発機構	2011年4月5日～4月8日	1,000
低消費電力エレクトロニクスと その設計に関する国際会議	IEEE Circuits and Systems Society, ACM Special Interest Group on Design Automation	2011年8月1日～8月3日	1,000
第11回ピーツーピー・コンピューティング 国際会議実行委員会	IEEE Communication Society	2011年8月31日～9月4日	1,000
第6回コグニティブ無線に基づく ネットワークおよび通信に関する国際会議	Institute for computer sciences, social- informatics and telecommunications engineering (ICST)	2011年6月1日～6月3日	1,000
ソフトウェアプロセス・プロダクト計測国際会議	奈良先端科学技術大学院大学	2011年11月1日～11月4日	1,000
音響・音声・信号処理に関する 国際会議 2012年	IEEE Signal Processing Society	2012年3月25日～3月30日	1,000
地球科学・リモートセンシング 国際シンポジウム	IEEE Geoscience Remote Sensing Society	2011年7月31日～8月5日	1,000
離散アルゴリズムに関する ACM-SIAM シンポジウム	米国計算機学会 米国応用数学会	2012年1月16日～1月19日	1,000
合 計		8件	8,000

2010年度から始められた著書出版助成、海外学会参加助成は以下のとおり決定されました。

### ◎著書出版助成

出版物名	執筆者	出版時期	助成額(千円)
情報セキュリティの価値と評価 ー ユーザーが考える個人情報の値段	早稲田大学 アジア太平洋研究センター 特別研究員 櫻井 直子	2011年12月	2,000
企業結合規制 ー 独占禁止法における競争評価の理論	名古屋大学大学院 法学研究科 准教授 林 秀弥	2011年8月	2,000
合 計		2 件	4,000

### ◎海外学会参加助成

参加学会名	参加者	開催時期	助成額(千円)
PTC (Pacific Telecommunication Council)	慶応義塾大学 メディアコミュニケーション研究所 金 美林	2011年1月16日～ 2011年1月19日	250
合 計		1 件	250

## 2010年度 研究奨励金対象者

2010年度研究奨励金が、4月の推薦受付、5月の選考委員会を経て、2010年6月29日の理事会において、次の通り決定されました。なお、研究奨励金は2010年度を以て廃止となります。2011年度からは、調査研究助成の拡大に加えて、新たに日本人大学生の海外留学を支援する「日本人留学生助成プログラム(仮称)」がスタートします。

研究課題名	所属 / 代表研究者	研究期間	金額(千円)
情報共有端末の利活用が 医療介護連携に与える効果	慶応義塾大学 総合政策学部 准教授 秋山 美紀	2010年7月1日～ 2013年6月30日 3年間	2,500
電気通信事業における「競争評価」の再検討	名古屋大学大学院 法学研究科 准教授 林 秀弥	2010年7月1日～ 2011年12月31日 1年6カ月間	1,000
多層石英導波路による 超小型波長選択スイッチ	慶応義塾大学 理工学部電子工学科 教授 津田 裕之	2010年7月1日～ 2013年6月30日 3年間	2,000
動的輝度補正技術を用いた 映像投影による複合現実環境の実現	電気通信大学 准教授 橋本 直己	2010年7月1日～ 2012年6月30日 2年間	2,500
言語情報間の論理関係の自動推論による言論 空間の可視化	東北大学大学院 情報科学研究科 教授 乾 健太郎	2010年7月1日～ 2013年6月30日 3年間	2,500
ハイブリッド無線アクセスネットワークに おけるワイヤレスエージェントに関する研究	大阪大学 工学研究科 准教授 塚本 勝俊	2010年7月1日～ 2013年6月30日 3年間	1,500
合 計		6 件	12,000

# 2011年度公募のお知らせ

2012年4月以降に実施されるものが対象となります。

## □ 調査研究助成

### (1) 対象

情報通信の普及・発展に寄与する調査研究（法律、政治、経済、社会、文化、技術の各分野あるいは各分野にまたがるもの）。特に、新規分野での独創的な研究や若手研究者の研究、国際共同研究および学際研究の申し込みを歓迎します。

ただし、通信事業者等の本来業務に該当する調査研究は対象外。

調査研究期間は、1年～3年まで（ただし2015年3月までに終了のこと）。

助成・援助の申込者は、個人の場合は調査研究者本人、グループの場合は代表者。

### (2) 助成・援助金額等

1件あたり最高300万円まで。10件程度。

## □ 国際会議開催助成

### (1) 対象

情報通信の普及・発展に寄与する国際会議で、先端技術にかかる課題から法制度や政策・技術の利活用など、幅広い分野での会議を歓迎します。

ただし、通信事業者等の本来業務に該当する国際会議は対象外。

2012年4月から2013年9月の間に開催される会議であること。

### (2) 助成・援助金額等

1件あたり最高100万円まで。10件程度。

## □ 社会的・文化的 諸活動助成

### (1) 対象

情報通信を利用し社会や教育等に貢献する各種の「草の根」活動。地域社会の国際化につながるような各種の活動、通信を通じて社会に貢献する各種の文化事業。通信の普及・発展、あるいは国際間相互理解の促進に寄与する活動・事業など（たとえば、イベント、講演会、ボランティア活動）。

ただし、通信事業者や地方自治体等の本来業務に該当するものは対象外。

2012年4月から2013年9月の間に実施されるもの。

### (2) 助成・援助金額等

1件あたり最高100万円まで。10件程度。

### 申込受付：2011年9月1日（木）～9月20日（火）

所定の申込書（当財団ホームページよりダウンロードできます）に必要な事項を記入のうえお申し込みください。

申込書は毎年更新されますのでご注意ください。申込書が手に入らない場合は、直接財団にご請求ください。

### 助成・援助の採否

審査委員会の審査を経て、2012年3月に開催予定の理事会で採否を決定します。この際、助成・援助希望金額は減額されることもあります。決定通知の金額で実施できないと判断されるときは、速やかに辞退を申し出てください。

### お問い合わせ・申込書請求・申込書送付先

財団法人 KDDI 財団

〒113-0021 東京都文京区本駒込 2-28-8

文京グリーンコートセンターオフィス 7F

E-mail: grant@kddi-foundation.or.jp

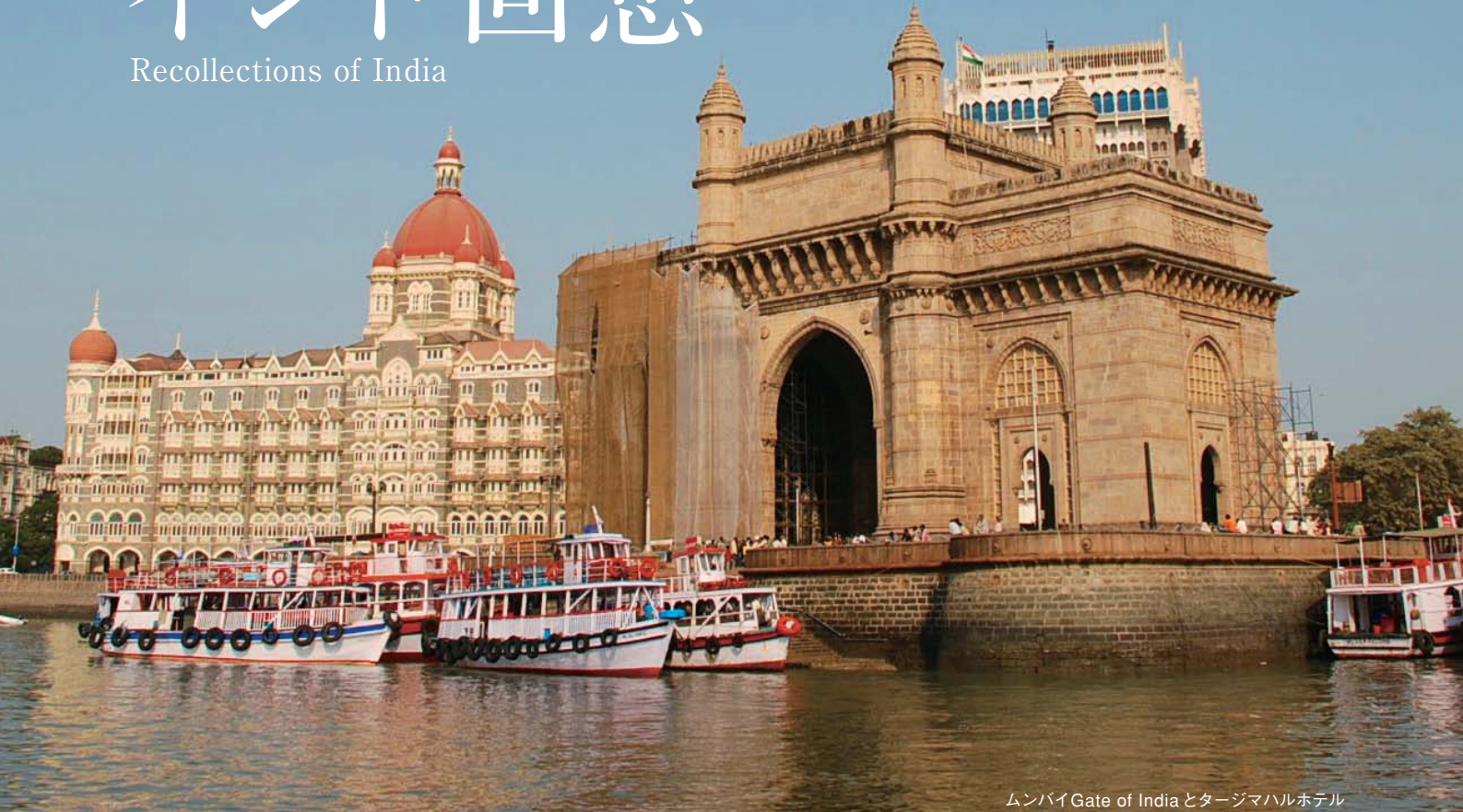
http://www.kddi-foundation.or.jp

KDDI 財団では、調査研究、社会的・文化的諸活動、国際会議への助成の他に、外国人留学生にも助成金を給付しています。対象となるのは、日本国内の大学院正規課程において情報通信関連の研究を進める外国人留学生で、あらかじめ当財団が指定する大学の推薦をうけた方々の中から、書類審査を行って決定します。助成期間は最長1年間。月々12万円を給付します。

2011年度からは新たに、海外（特に開発途上国）に留学する日本人学生向けの助成プログラムを開始します。対象は日本国内の大学もしくは大学院に在籍している、翌年度修士、博士課程を履修する35歳以下の学生です。外国人留学生助成と同様、あらかじめ当財団が指定する大学の推薦をうけた方々の中から決定します。

# インド回想

Recollections of India



ムンバイ Gate of India と タージマハルホテル



KDDI 株式会社  
ソリューション推進本部  
グローバルソリューション部2グループ  
課長補佐  
(前KDDIインドムンバイ支店)

## 杉村 和彦

Assistant Manager  
Global Solution Engineering Department 2nd Group  
Solution Engineering Division  
(ex-KDDI India Mumbai branch)  
KDDI Corporation  
Kazuhiko Sugimura

私が初めてインドの地を踏んだのは、今から15年前、当時担当していた回線サービスを、インドの通信事業者と相互接続するための交渉グループの一員として、ムンバイに出張した時である。ムンバイの空港に着陸し、機内から一歩踏み出した時の独特な臭い、警察官が大勢居て緊張したこと、空港ターミナルビルを出た時の喧騒などを鮮烈な印象として今でもはっきり覚えている。空港からホテルへ向かう途中に見たバラックの一群や電柱の雑然としたケーブル付設の状況に衝撃を受け、本当に当社の回線をインドに接続してサービスが出来るのか、次の日の交渉を前に暗澹たる気持ちになったものだった。この時は後にインドと深く関わることになるとは思ってもよらなかったが、1998年のKDDテレコメットシンガポール（現KDDIシンガポール）への赴任後、当時、当社の拠点が無かったインドに数多くの出張を経験し、その後、インド拠点設立（KDDIシンガポールインド駐在員事務所、その後KDDIインド）とともに、2006年から2010年までの4年間、前半2年間でニューデリー、後半2年間でムンバイに駐在した。インドでの生活は習慣等の違いもあって厳しく、慣れ

るまでかなり苦勞すると一般的に言われているが、私の場合、多くの出張を通して現地事情を概ね理解していたことが幸いし、取り立てて苦勞もなく駐在生活を開始することが出来た。駐在を開始して生活にも慣れてくると、元々好奇心が旺盛ということもあるが、インドに駐在の機会を得たからには、インド人社会や文化などについて深く知りたいとの思いを持つようになった。そこで、現地の事を理解するにはまず言葉からと考え、週2回、出勤前に自宅まで先生に来てもらい、ヒンディー語の授業を受けることとした。インドは連邦公用語として英語とヒンディー語が指定されているが、英語は地域や階級で通じないことが多い。それに比べてヒンディー語はインド南部など使用率の低い地方もあるものの、英語より通じる範囲はかなり広く、私の駐在したデリーやムンバイでは、階級に関係なくヒンディー語が話されている。実際、生活の中でも英語が通じず、ヒンディー語が役立ったことは多々あった。一見ヒンディー語はその絵文字のような文字から難しい言語ととらえられがちであるが、ヒンディー語と日本語では語順が全く同じであり、日本人にとっては親和性の高い言語である。インド人にとっても同様で、インド人が日本語を学習すると上達が早く、流暢に話すようになるのもあまり時間がかからないようである。ヒンディー語の授業は約1年続き、流暢と言うまでのレベルには程遠かったものの、簡単な会話は何とか理解できるようになった。つたないヒンディー語ではあったが、現地の色々な階級の人達と話が出来たことで、インド人社会の理解を進めるにあたって、大きな力となった。さらに業務上でもヒンディー語が役に立った。語学は使うことが一番の練習なので、お客様の事務所や現地通信会社等を訪問した際、現地スタッフに積極的にヒンディー語を話すようにしたところ、日本人がヒンディー語を話すのが珍しいのか、話が自然と盛りあがって、すぐに打ち解けあうことが出来、営業活動や人脈作りに大きく貢献した。

インドにおいては生活面のみならず、仕事上においても苦勞が絶えない。まず腐心したのは、スタッフの採用である。当社のインドにおける主要な業務はインドに進出した日系企業の事務所や工場に対する通信ITインフラの構築、保守作業であり、事務所の立ち上げに際し、技術担当と総務担当の採用の面接を実施した。インド人は一般的に自己アピールが上手いことに加え、履歴書もかなり誇張して書いてく

る。例えば技術者の場合、ある装置を1回触っただけでもマスターした様に記述するのがごく普通で、保有する資格についても、構成する4科目全てに合格して取得できる資格に対し、2科目しか合格していないにも関わらず、資格を保有しているように書かれていることも多くあった。人口が多く競争が激しい中で、何とかより良い条件の職を得たいとの一心の事と思うが、候補者の実際の能力と適性を見極めるのに非常に苦勞した。ただ、苦勞はしたが、面接を通して私自身もインド人の適性と能力を見極める能力がかなり鍛えられ、貴重な経験となったのも事実である。

採用が終わって安心するのはまだ早い。日本人は一般的に守備範囲がかなり広く、色々な装置や技術に対応できるのに対し、インド人技術者は、一般的に技術力はあるものの、守備範囲が狭く、限られた装置や技術にしか対応できない。また、文書作成も日本では技術者の重要なスキルであるが、インド人技術者の場合、経験が無いのか、大抵不得意であった。我々の事務所は規模が小さく、技術者の人数も少なかったことから、日本人的な守備範囲の広さが求められた。そのため、時間がかかるが、文章の書き方を含めて分らないことは丹念に指導するということが必要であったが、インド人技術者は勤勉かつまじめであり、自分のキャリアアップのため、新しいことを吸収したい意欲に溢れていたことは大きな救いであった。

インドにおいては娯楽が少ないのも生活が厳しいといわれる一因でもある。日本の居酒屋みたいな所はほとんどなく、スポーツもゴルフ、テニス、ソフトボール等が出来るが、ニューデリーの場合、夏場は45度まで温度が上昇するので、外出する気さえ起さない。私自身走るのが好きで、赴任早々ランニングウェアに身を包み道路に出たが、走りまわる多くの野良犬を見てすぐに道で走るのをあきらめ、それ以降、走るのもっぱらジムのランニングマシン上となった。インドは世界でもっとも狂犬病で命を落とす人が多く、毎年1万5000人以上が亡くなっているのである。

厳しいインドの生活であったが、その中で私にとって3月頃から市場に出てくるマンゴーはインドにおける大きな楽しみの一つであった。インドは世界最大のマンゴー生産国で、6種類ほどが栽培されている。その中で一番のお気に入りにはマンゴーの王様と言われているアルフォンソである。果肉は柔ら

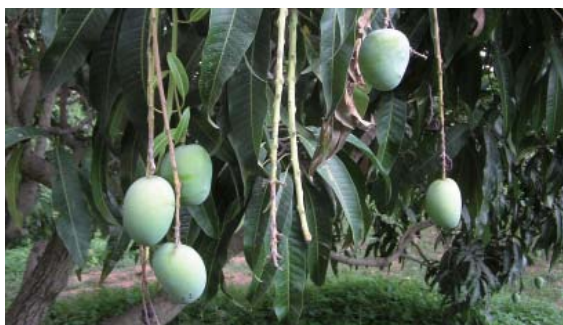


オートリキシャ(三輪タクシー)



ガンジス川で沐浴

かくて酸味と甘みのバランスが絶品で、一度食べたら病みつきになり、シーズン中はほとんど毎日かかさず食べていた。日本ではマンゴーは数千円から時には数万円もする高価な果物であるが、インドの場合、最高級のアルフォンソマンゴーでも1個100円から200円程度で買うことができる。マンゴーの栽培時期は種類によって若干異なっており、3月～8月頃まで何かしらの種類のマンゴーがマーケットで見られる。インド人にとってもマンゴーには目がないうので、シーズン中は空港の到着ロビーで預けた荷物を受け取るベルトコンベアに、旅行者がお土産として運んできたマンゴーの箱が数多く回っているのをよく見る。また、マンゴーを食べると目が良くなるとか、お腹をこわすので1日1個以上食べてはいけないなど、マンゴーにまつわる話も色々聞くのもこの時期である。マンゴー以外にも、インドは国土が広大なこともあり、おなじみのダーズリン、アッサム等の紅茶を始め、最近日本でも話題となったインドワイン、紅茶の陰に隠れているものの、風味豊かなコーヒー豆などの名産品も数多い。



マンゴーの木

昨年(2010年)4月に帰任して以来、インドとの関わりは薄くなってしまったが、今になって落ち着いてインドで過ごした4年間を思い返してみると、駐在中は毎日が精一杯で考えることもなかったが、本当に色々なことを経験し、自分自身成長出来たと思っている。インドで経験する1年間は他国の2年分に相当すると言われるが、実際に生活して見ると、まさにその通りであった。インド駐在と聞くと尻込みする人が多いと聞くが、色々なことを経験し、成長出来ること間違い無しなので、特に若い人は恐れることなく挑戦してほしい。現在インドは経済発展が続いており、私が初めてインドに足を踏み入れた15年前は車と言えばインド産のアンバサダーとスズキと現地資本の合弁で設立したマルチスズキ社製のマルチ800ぐらいしか見られなかったが、今では有望な国内市場に注目して世界中の大手自動車メーカーがこぞって進出し、町の中を走る自動車の種類は格段に増えた。また大都市周辺には近代的なショッピングモールの建設ラッシュが続いており、インドの発展に対する大変な力強さを感じる。BRICsの一角として、更には中国に対するリスク分散として、インドは脚光を浴びており、進出する日系企業も確かに増えているのも事実であるが、日本人のインドに対する知識も、またその反対にインド人の日本に対する知識もまだそれほど深くなく、まだまだ遠い国であると言わざるを得ない。今後日系企業の進出がさらに増え、人的交流を通じた相互理解が進み、日本とインド両国間の関係がより緊密となっていくことをインドOBとして心から願っている。



## Recollections of India

The first time I stepped foot in India was 15 years ago, as a member of a team sent from Japan in charge of line services to negotiate for collaboration with a local Indian communications company in Mumbai. The distinct odor I smelled from the moment I stepped off the plane at the airport in Mumbai, the nervousness I felt at the presence of so many police officers, and the tumult as I left the airport terminal; all the impression I received was so intense that I still remember these things clearly. When I saw the barracks and conditions that cables were laid disorderly on the telephone pole, I was in shock, and wondered if we could really connect our line in India and provide services, making me feel gloomy about the negotiations taken place the next day.

At that time I had no idea I would forge a deep relationship with India. In 1998 I was sent abroad to KDDI Telecomet Singapore (currently KDDI Singapore) and experienced many business trips to India, and after that when our India office opened (KDDI Singapore-India Office; later KDDI India) I spent four years from 2006 to 2010 in India, the first two years in New Delhi and the latter two in Mumbai.

It is generally said that life in India is difficult to get used to, given the cultural differences but luckily for me, my many business trips helped me to understand local conditions, and allowed me to begin my life in India with little problems. Once I got used to the local life, possibly helped by my inherent curious nature, I felt like I wanted to get to know Indian society and culture deeply, since I had been given the opportunity to stay there. I thought to understand local things I must first learn the language, and I arranged for a tutor to come for lessons in Hindi two times a week in the morning before I leave for work.

India federally has two official languages; English and Hindi, but depending on social class or region, many people can't speak English. In comparison, Hindi, although not used widely in regions such as the south, is more wide-spread than English; and Hindi is spoken regardless of social class in cities such as Mumbai and New Delhi in which I stayed. In fact there were many cases in which I couldn't communicate in English and was helped by my Hindi. At first glance, Hindi seems difficult perhaps because of its pictorial look, but the order of words is exactly the same as in Japanese, and Japanese people have a strong affinity for the language. In the same way, Indian people pick up the Japanese language very quickly and it seems like it doesn't take a long time for some to be able to speak it fluently.

My Hindi lessons continued for a year, and although I was far from being fluent, I was able to follow everyday conversations. Although poor, my Hindi helped me to advance my understanding of Indian society by allowing me to speak with local people of various social backgrounds or classes. Hindi also helped me in my work. Because actually using the language is the best way to practice it, I would actively use my Hindi when talking with customers or local carriers, etc. Perhaps it was out of the ordinary for them to see a Japanese person speaking in Hindi, so the conversations were lively, and I was able to make friends easily and this helped me greatly in creating business contacts and conducting sales.



果物屋

Not only are there always hardships in everyday life in India, but the same is also true in business. First of all, employment of staff is a great deal of trouble. The main business of KDDI's Indian operation was to build communications and IT infrastructure while carrying out maintenance work for the local offices and factories of Japan-based companies, which were expanding in India. When opening our new office, I conducted interviews to hire technical and general affairs staff. In general, Indian people are very good at selling themselves, and in addition to this they exaggerate their resumes a great deal. For example in case of technical staff, there were people who would act as if they had mastered the use of equipment even if they had just touched once; or in other cases people would claim that they possessed a certification that requires them to have passed four subjects when they had in fact only passed two. This was not uncommon. I think this represented people's hopes to find jobs with better conditions in such a densely populated and highly competitive environment, but it was extremely difficult for me to determine an applicant's actual abilities and whether he/she would be an appropriate match for the position. On the other hand, since this was such a difficult experience for me, I was able to train myself in determining the appropriateness and ability of Indian people, and this was indeed a very important experience.

It's too early to relax once you've hired somebody. Japanese technicians can generally work with a wide range of equipment and technology, but on the other hand their Indian counterparts are generally technically skilled, but only in a small range of equipment and technologies. In addition, writing is an important skill for technicians in Japan, but in India writing is something the technicians are usually not good at because they perhaps lack experience. Our office was small, and there were few technicians so we needed technicians who could work with a wide range of equipment and technology like Japanese technicians. For this reason, it took a long time, but it was necessary to thoroughly instruct employees including how to write correctly. Indian technicians are diligent and earnest,

and their drive to absorb new things in order to enhance their careers helped me out immensely.

The lack of entertainment is said to contribute to the harshness of everyday life in India. There are almost no local pubs like Japanese Izakaya, and it's possible to play golf, tennis, softball, etc, but temperatures rise to as high as 45 degrees centigrade in the summers in New Delhi, and it's hard to even go outside. I personally like jogging, and was in my running gear early on when I had just moved to India, however gave up running on the streets as soon as I saw all the stray dogs roaming the streets. After that, the only running I did was on a running machine at the gym. The most people die of rabid bites in India in the world, and more than 15,000 people die each year.

Although life was not easy in India, the mangos that come out to the markets starting around March were one of the things I most looked forward to. India is the world's largest producer of mangos and there are about six varieties grown. My favorite is the Alphonso, known as the king of mangos. The fruit is soft, with a fantastic balance of sweet and sour flavors, and is truly addicting. I ate mangos almost everyday during the season. In Japan, mangos cost several thousand yen to tens of thousands yen and is considered a luxury fruit, but in India the very finest Alphonso mangos are sold for 100 to 200 yen each. The harvesting season for mangos varies slightly by type, and between the months of March and August there is some sort of mango available on the market. Indian people seem to love them too, and during mango season you can see many boxes of mangos on belt conveyors at the baggage claims in airports. Furthermore, during mango season I heard many rumors about mangos being good for your eyes, or that it's not good to eat more than one a day, etc. Other than mangoes, India also has vast land and produces Darjeeling, Assam, and other teas, and also wines which have recently

gained interest in Japan, and although hiding behind the rich varieties of tea, there are also many finely flavored specialty coffee beans as well.

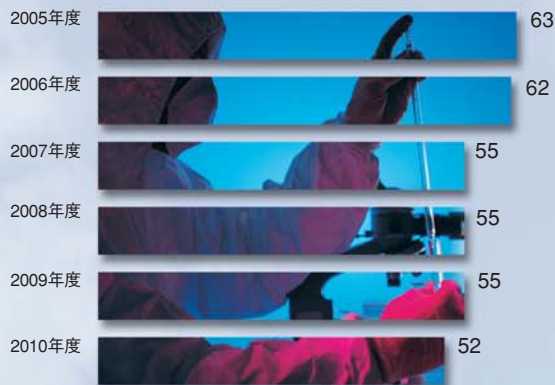
Since I came back in April of last year (2010), my ties with India have become slim but now that I recollect over the four years that I spent in India, I was doing my best everyday and didn't even have time to think, but I experienced many things and think that I was able to grow as an individual. Some say that spending one year in India is the same as spending two years in another country, and actually living there that is exactly how I felt. I hear that many people shrink back from the thought of living in India for business, but it is definitely a chance to experience many things and grow as an individual, so I especially urge younger people to go for it and not be scared. India currently continues its economic development. 15 years ago when I first stepped foot in India I only saw the Maruti 800 that Maruti Suzuki, a company set up with a local capital merger between Suzuki and India's Ambassador, but now with the world's major car manufacturers are entering this promising market, and the types of cars running the streets of India have gone up by leaps. Furthermore, around large cities the construction rush of modern shopping malls continues and I feel a great power in the development of India. As a member of BRICs, and also as a dispersion of risk from China, India is in the limelight, and there are a growing number of Japanese companies that are entering the Indian market, but Japanese people's knowledge of India, and Indian people's knowledge of Japan are not deep at all yet, and I can't help but say the two nations are still very far apart. As one who has lived in India, I hope that the relationship between Japan and India become closer and that the mutual understanding progresses through human exchange, and more Japanese companies enter the Indian market.



インドの女性達

## ◎ KDDI財団の助成実績

助成件数の推移 (単位: 件)

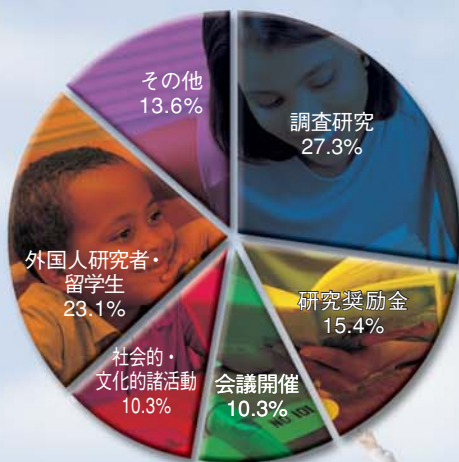


助成総額の推移 (単位: 百万円)



## ◎ 2010年度 助成・援助の構成比

助成総額 77,810千円



## 財団法人KDDI財団 役員名簿

理事長	伊藤 泰彦	KDDI 株式会社 顧問
専務理事	赤澤 秀樹	
理事	江崎 浩	東京大学大学院情報理工学系研究科 教授
理事	大山 俊介	KDDI 株式会社 執行役員経営戦略本部長
理事	佐々木かをり	株式会社イー・ウーマン 代表取締役社長
理事	土佐 和生	甲南大学法科大学院 教授
理事	中村 伊知哉	慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科 教授
理事	野原 佐和子	株式会社イブシ・マーケティング研究所 社長
理事	樋口 泰行	日本マイクロソフト株式会社 代表取締役社長
監事	松永 幸廣	京都監査法人マネージング・パートナー 公認会計士

理事は五十音順/◎印は常勤 2011年3月31日現在

## 財団法人KDDI財団 評議員名簿

有富寛一郎	KDDI 株式会社 代表取締役副会長
氏家 純一	野村ホールディングス株式会社 取締役会長
内海 善雄	株式会社トヨタIT開発センター 最高顧問
岡 素之	住友商事株式会社 代表取締役会長
沖原 隆宗	株式会社三菱UFJフィナンシャルグループ 代表取締役会長
小野寺 正	KDDI 株式会社 代表取締役会長
角川 歴彦	株式会社角川グループホールディングス 代表取締役会長兼 C.E.O.
金子 郁容	慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科 教授
姜 尚中	東京大学情報学環 教授
草野 耕一	西村あさひ法律事務所 代表パートナー 弁護士
菅谷 実	慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所 教授
土井美和子	株式会社東芝 研究開発センター 首席技監
永井 研二	日本放送協会 専務理事技師長
林 敏彦	同志社大学大学院 総合政策科学研究科 教授

五十音順 2011年3月31日現在

## 編集後記

P 6～7で紹介されているカンボジアの影絵芝居、スバエクトムを見せていただく機会がありました。ほんのひとつまででしたが、荘厳な雰囲気には圧倒されました。初めて薪能を見たときの衝撃と似ているかもしれません。水牛の革で作られた影絵人形は精巧に彫られていてまさに芸術品。まもなくカンボジアに第6校目のKDDIスクールが開校しますが、“伊達直人”になって子供たちをスバエクトムに招待できたら、どんなにすてきでしょうか。(理)

KDDI Foundation Vol.2

発行 / 2011年4月1日

編集・発行責任者 / 佐藤 隆

財団法人 KDDI 財団

〒113-0021 東京都文京区本駒込 2-28-8

文京グリーンコートセンターオフィス 7F

Tel : 03 (5978) 1051 Fax : 03 (5978) 1050

Email : office@kddi-foundation.or.jp

http://www.kddi-foundation.or.jp

設立 : 2009年10月1日 出捐 : KDDI株式会社